

平成30年 6月30日現在

機関番号：82691

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13348

研究課題名(和文)SDG世界の幕開け：サステナビリティ評価で国際社会は変わるか？

研究課題名(英文)The role of evaluation in achieving SDGs

研究代表者

長尾 眞文(Nagao, Masafumi)

国際連合大学サステナビリティ高等研究所・サステナビリティ高等研究・客員教授

研究者番号：10304461

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：SDG達成のための評価の役割について6名の研究者から成るチームで多角的視点から挑戦的萌芽研究を行った。SDGの評価関心が成果モニタリングに傾斜しがちなのに対して、SDG達成に向けて実施される多様な事業について事業前評価や評価可能性重視の革新的な評価の活用で取組成果の改善が期待できること、複数の課題にまたがる事業についてネクサス・アプローチを用いた評価が可能なることを明らかにした。研究の実施過程では日本政府、国連機関のSDG推進担当者と連携して研究成果の普及を図ったほか、全研究者で共同執筆した評価の役割に関する論文をSustainability Science誌上で発表した。

研究成果の概要(英文)：A team consisting of 6 researchers conducted pioneering research on the role of evaluation in achieving SDGs. While evaluation concern for SDGs tends towards outcome monitoring, the team demonstrated the relevance and utility of other approaches, such as proactive evaluation and evaluability assessment which may be used at early stages of project/program implementation to increase the chance of success. The team also experimented with evaluation of projects that addressed multiple SDG targets using a nexus approach. The team collaborated with senior officials of the Japanese Government and UN organizations for dissemination of research results. The team members jointly published a paper in Sustainability Science, one of the key journals in sustainability field.

研究分野：事業評価論

キーワード：サステナビリティ モニタリング評価 SDG 評価 事業前評価 評価可能性

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的ルーツは、国際協力論と事業評価論における開発の持続可能性に関する実践的研究関心にある。1987年の国連「環境と開発に関する世界委員会」の報告(『地球の未来を守るために』、通称「ブルントラント報告」)で提起された持続可能な開発の考え方は、一方で開発の遅れた途上国の経済社会開発を後押しする政策研究の流れ、他方で気候変動、生物多様性といった地球規模の生態系の変容に関する科学的検証の動き、とふたつの並行的な国際協力論の系譜を導いた。SDGの合意は、両者の統合的検討を促すものであるが、その成否は共通の評価の枠組みの開発に掛かっている。また、開発の持続可能性は、事業評価論でも国際援助プロジェクトの効果の継続性の課題(OECD 開発委員会が1991年に公表した援助評価5項目のひとつ)として取り上げられてきた。SDGは、多分野横断的課題も含めて、より総合的な視点からの新たな評価アプローチを必要とする。本研究では、国際協力論と事業評価論の双方の研究関心を統合して、新たに「サステナビリティ評価」の枠組みの構築を目指した。

本研究では、国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS)の研究者と日本評価学会(JES)に所属する評価研究者が協力して、前者の持続可能な開発に関する知見・研究実績と後者の国際協力分野の評価研究の知識・経験を組み合わせることにより、SDGをめぐる国際協力に関連する最先端の研究課題である評価研究と取り組んだ。研究代表者は、UNU-IASとJESの双方に在籍しており、自らの実用重視の評価研究*の経験からこの研究を着想した。

2. 研究の目的

2000年～2015年のミレニアム開発目標(MDG)が一定の成果を挙げたことを受けて、国際社会は2015年9月の国連総会決議で新

たな持続可能な開発目標(SDG)の設定に合意した。17の多様な目標から成るSDGは、2030年までに貧困を撲滅し、生態系を保全し、全ての人に繁栄をもたらすよう地球規模で取り組むとの決意表明である。本研究では、MDGの数値目標達成に向けて国レベル、国際レベルでのモニター評価が役立ったとの認識に基づき、目標達成水準と達成努力の抱き合わせや目標相互間の関連性の重視で複雑化したSDGの取組に対しても系統的なサステナビリティ評価の仕組みを構築できるか、そしてそれが機能することにより地球レベルで持続可能な社会の実現可能性をチェックできるか、を研究課題とした。それは国際協力の推進に対する評価の役割を問う新たな試みであった。

3. 研究の実施方法

< 研究の枠組み >

2年計画で実施した本研究では、SDGの17目標が大別して8つの個別分野傾斜的目標(教育、衛生、インフラ等)、8つの多分野横断的目標(持続可能な都市、生態系の保護等)、1つの全部門関連目標(実施手段の強化)に分かれることに着目し、初年度(平成28年度)に個別分野傾斜的目標の中で特に日本にとって戦略的重要性の大きい目標を選んで評価の枠組みを検討し、二年度目(平成29年度)には初年度の研究成果(特にその相互関連性)を踏まえて、多分野横断的・全部門関連目標の視点からの包括的評価の枠組み構築の可能性を検討することを試みた。方法的には、前者は主として特定の目標に関連する取組を実施している国におけるフィールド調査、後者はSDGについて総合的な評価の取組を行っている国際機関からの聞き取り調査に依拠した。

< 研究の実施方法 >

実際の研究の進め方は各研究者に任されており、それぞれで文献調査、国内外のフィールド調査、専門家への聞き取り等の方法を駆使

して研究調査を行った。その具体的内容と成果については次章で報告する。研究チーム全体としては、主にお互いの研究の進捗状況に関する情報交換を目的として定期的に研究委員会（2年間で計9回）を開催した。

また研究代表者と研究協力者2名が日本評価学会のサステナビリティ評価研究分科会に所属していることから、2017年5月20日の春季全国大会（東京）で本研究に対する関心を喚起するための懇談会をブラウンバッグ・ランチ形式で開催した。また2017年12月16日 17日の秋季全国大会では、インドゥラン・ナイドゥ国連開発計画評価部長の参加を得て本研究事業の成果報告を行うとともに、別セッションとして組まれたSDG評価の検討の場にもこの研究で共同執筆した評価の役割に関する論文について報告を行った。

4．研究成果

本研究では研究代表者を含む6名の共同研究者がそれぞれのSDG評価に関する研究関心に従って2年計画の研究を行い、個別に研究論文を作成し内外の学会で報告した。学会誌で発表した。また当初の研究計画に従いでそれぞれの研究を行いながら横並びで研究の進捗状況を共有しつつSDG達成に評価が果たす役割について継続的に意見交換した。その成果として研究参加者全員の共同執筆に論文をSustainability Science誌で発表した。

SDGのモニタリング・評価は国単位で行うことが基本合意されているが、本研究では日本国内のSDG評価を行うだけでなく、他国よいかかh他地域さらには地球規模の課題の評価にも取り組んだ。そのため海外の研究者や評価者と連携協力し、常にSDG評価の国際的動向について情報を摂取することを試みた。特に国連開発計画（UNDP）の評価部長に日本評価学会の全国大会への参加を通してSDG評価の関心の喚起に貢献していただいた。

挑戦的萌芽研究では研究の「斬新性・チャ

レンジ性」が問われる。本研究では特に革新的な評価手法開発と応用を試みた。研究代表者によるアフリカの企業家人材育成事業構想への事業前評価の適用、研究協力者のひとりによる理念的なSDG教育目標に関連する事業における評価可能性手法の活用、さらにもう一人の研究協力者による複数のSDG目標にまたがる評価ツールの開発と適用等一応の成果をあげることができた。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Yonehara, A., Saaito, O., Hayashi, K., Nagao, M., Yanagisawa, R., and Matsuyama, K., "The Role of Evaluation in Achieving SDGs," *Sustainability Science*, published on line on 7 September 2017, DOI 10.1007/s11625-017-0479-4.

〔学会発表〕(計 3 件)

長尾眞文（日本評価学会、2017年12月）

米原あき（日本評価学会、2017年12月）

林薫（日本評価学会、2017年12月）

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

長尾眞文 (NAGAO, Masafumi)
国連大学・サステイナビリティ高等研究所
客員教授
研究者番号：10304461

(2)研究分担者

林薫 (HAYASHI, Kaoru)
文教大学・国際学部・教授
研究者番号：30383219

米原あき (YONEHARA, AKI)
東洋大学・社会学部・准教授
研究者番号：40633847

齊藤修 (SAITO, Osamu)
東京大学・サステイナビリティ学連携研究
機構・客員准教授
研究者番号：50397668

(3)研究協力者

柳澤龍 (YANAGISAWA, Ryu)
秋田県五城目町地域おこし協力隊

松山加奈子 (MATSUYAMA, Kanako)
国連大学・サステイナビリティ高等研究所